

横山ゆずり作 「センチメンタル・ジャーニー」

効果音 (列車の発車音。発車ベル。車掌アナウンス)

車掌 えー、お待たせいたしました。この列車は、中央本線松本行き、中央本線松本行きです。当駅を出ますと、八王子、高尾…(FO)

中山浩(モノローグ)(ため息) やっと間に合った。危なかったなあ。乗り遅れるところだった。だけど、やっぱり今ごろの時期はすいてるなあ。この席でいいや。よいしょと。

効果音 (荷物をドサッと降ろす)

車掌 …(FI) 終点松本には 13 時 58 分に到着の予定です。

浩(モノローグ) 13時ということは1時58分か。さてと、弁当も買ったし、カセットも持ってきたし、時間はたっぷりあるんだから、まずひと眠りするかな。あ〜あ(あくび)今朝早かったからな、眠いや。

ナレーション おやおや、列車に乗り込んだ途端にひと眠りとは。彼は中山浩。青春中学の3年生。随分と旅慣れた様子ですが、実は、一人旅は初めてなんです。どうしてまた急に、彼が一人旅を思い立ったかって？ あなたどう思いますか？ え？ 失恋したからだろうって？ まあそんなところですよ。おまけに、その失恋のショックで、その後の中間試験の結果はメチャクチャ。もう踏んだり蹴ったりでした。そこで、試験休みを利用して、この際、自分を見つめ直そうと、まあちょっぴりセンチメンタルな旅に出たわけなんですけど…。あら、浩君、どうやらお目覚めのようですよ。

浩(モノローグ) (あくび)よく寝た。弁当でも食うかな。それにしても、いろんな人が乗ってるなあ。あのおじさん、すごい荷物だな。あれ、子供へのお土産だろうな。あのおばさん、さっきからミカンばかり食ってるよ。あれー、あの女の子、一人旅かなあ。文庫本なんて広げちゃって。文学少女を気取ってらあ。女の子って、やっぱり一人旅にあこがれるのかなあ。あの子、おれと同じに失恋でもしたのかなあ。

長谷川一彦 あの一、ここ、席、空いてますか？

浩 (我に返って) ああ、空いてますよ。どうぞ。(モノローグ)「空いてますか」って、こんなガラガラ空きの列車、なにもわざわざおれの前に来て座ることもないだろうに。まあ、“旅は道連れ”っていうからな。話でもしてやるか。

浩 どこまでですか？

一彦 え？

浩 おれ、松本まで行くんだけど、君も？

一彦 え？ (ぶっきらぼうに) ああ、松本。

浩 そうか。じゃ、しばらくの間、一緒だね。おれ、中山浩っていうんだ。今、高2。よろしく。

一彦 …ああ、よろしく。

浩 あの一、おれさ、一人旅って初めてなんだけど、旅行は割と好きなんだ。君は？ 一人でよく旅行するの？

一彦 …いや、…別に。

浩 …そう。(モノローグ)なんだ、こいつ。人の前に座ってきたから話しかけてやったのに。人をバカにしやがって。それにしても、なんて言うか、サエない顔してるなあ。思いつめたっていいのか…。なんだか今にも自殺でもしそうな感じなんだよな。あんまりかかわらないほうがい

いかもな。どっちみちおれには関係ないさ。そうだ、カセットでも聴くかな。

ナレーション 浩君たら、さっきは“旅は道連れ”なんてカッコいいこと言っていたのに。さて、そろそろ目的地が近くなってきました。

浩(モノローグ) 忘れ物は大丈夫だな。あ、君、忘れものだよ。おい！

一彦 え？ ああ、それ、要らない。

浩 「要らない」って。それなら、ちゃんとゴミ箱に捨てろよ。

一彦 じゃあ…、君にやるよ。(と言って行ってしまう。)

浩 「やるよ」って、そんな。おい、待てよ！(モノローグ)こんな物もらう筋合いないぜ。捨てちまおう。…いや、少し持ってみるか。だけどあいつ、本当におかしなやつだなあ。

効果音 (浩、砂利道を歩いている。)

浩(モノローグ) 枯れ葉がエラいつ持ってるなあ。へー、この神社、江戸時代から続いているのか。なにになに、重要文化財だって？(歩く間)うわあー、すごいなあ。こんな所に。これ、なんていう湖かなあ。きれいだなあ。だけど、冷たいだろうな。底も深そうだし。こんなところから落ちたら、ひとたまりもないな。心臓マヒですぐにあの世行きだな。なにになに、「もう一度、家族の顔を思い出して、よく考えよう」だって？そうか、自殺の名所なんだなあ。よっこいしょつ。(腰掛ける) あーあ、今ごろ、みんなどうしてるかなあ。休みだから、ボウリングでも行ってるのかな。久美ちゃんどうしてるのかなあ。…やめたやめた。こんなに空気も景色もきれいなところに来たんだ。東京でのつまらないことなんか忘れちまおう！(大きく深呼吸)あ～あ、空が高いなあ。

効果音 («ポチャン」と石を水に投げ込む音。もう一度。)

浩(モノローグ) あれ、あそこにいるのは、ありゃ、昨日の列車で一緒だったやつじゃないか。また会うとはな。感じ悪いやつだけど、あいさつくらいしてやるか。お～～い！(走り出す)  
(荒い息遣い)昨日さ、同じ席に座っただろ？ 覚えてる。

一彦 (びっくりしたように)ああ。

浩 列車降りる時に、君が置いてった物、おれ、預かってるんだ。

一彦 …あれは「やる」って言ったろ。

浩 そんなこと言われても困るよ。明日またここへ来てくれよ。返すから。

一彦 (迷惑そうに)いいったらいいんだよ。要らなきゃ捨ててくれよ！

浩 そんな言い方ないだろ。そんな、まるで形見みたいだな…。(言いかけてハッとす)君、まさか…。

一彦 うるせえな。人が何しよう勝手だろ。ほっといてくれよ！(言い捨てて走り去る)

浩 失礼なやつだな、まったく。…もしかしたら、もしかしたら、ここで死のうとしていたんじゃ…。いや、まさかな。それに、おれがそこまで心配してやることないんだ。あ～あ、せつかくの一人旅に、不愉快な思いしちまったな。さてと、ぼちぼち宿へ帰るか。

ナレーション 民宿に帰った浩君が、窓から夕やみ迫った外を眺めていると――。

西田圭一 やあ、こんばんは。君も一人旅？ 学生らしいけど。

浩 はあ、おれ、高2ですけど。

西田 ふーん。僕、3日前から、この民宿に泊まってるんだけど、よかったら少し部屋に来て話さないかい？

浩 はい。どうせおれも暇ですから。(モノローグ)この人も一人かあ。昨日は変なやつと会った

まったからな。まあ、この人はいい人みたいだし、話してみるか。

ナレーション

とかく、旅には出会いがつきものですよ。浩君の一人旅での 2 度目の出会いは、西田さんという大学生。初対面の 2 人ですが、旅の気安さからか、話はどんどん進みました。

西田

そうか、そんなやつに会ったのか。きっとそいつも何か悩みを抱えて旅してたんだよ。例えば、君のように失恋したとかね。(笑う)

浩

ひどいなあ、からかうなんて。そういう西田さんは、どうして一人で旅なんかしてるんです？

西田

いや、ごめんごめん。僕かい？ 僕は別に悩みなんかなくても、よく旅に出るよ。こいつを持ってね。

ナレーション

そう言って西田さんが見せたのは、一冊の聖書でした。

浩

聖書…。クリスチャンなんですか。なあんだ、道理でいやに悟ったこと言うと思ったよ。

西田

そんな顔するなよ。聖書ってのはね、別にお説教の本でも、イエス・キリストの伝記でもないんだ。僕たち人間はね、だれでも…。(FO)

ナレーション

西田さんの熱っぽい話しぶりに、初めは興味なさそうだった浩君も、いつしか聴き入っていました。

浩

…ふーん。よく分からないけど、その、イエス様って人を信じれば、西田さんみたいに、悩みもなく暮らせるんですか？

西田

いや、僕だって、悩みがないってことはないけれど、イエス様に信頼を置いているから、決定的に落ち込むことはないね。

浩

へえ、それじゃ、やけばちになって、自殺したりすることなんてないわけだ。(間)自殺って言えば、あいつ…。

西田

どうかしたのかい？

浩

ほら、さっき話した、感じ悪いやつ。今日も会ったんだ。湖を見下ろす高台の上で。その時も、思い詰めた顔してたから、“もしかしたら、死ぬ気かも”って思って。でも、その時は、おれには関係ないと思ったけど、今の西田さんの話聞いてたら、なんだか急に気になってきたな。

西田

そりゃいけない。思い過ぎだといいいけど、でも、間に合うかもしれない。浩君、すぐに行ってみよう！

浩

うん。もしあいつにあったら、また今みたいに、イエス様っていう人の話、してやってよ。

ナレーション

そう言いながら、西田さんの跡を走る浩は、手にしっかりと聖書を握り締めていました――。

<完>